



## 巻頭言

# 幼児の「発達」をどう見るか

佐伯 胖

「発達」という言葉を聞くと、読者の方々はどのようなことを思い浮かべられるでしょうか。

「赤ちゃんが話しかけると笑ってくれるようになったよ」「自分で寝返りを打って、見たい物をじっと見つめるようになったよ」「もうはいはいができるようになったよ」などなど、「できなかったことが、できるようになること」のあれやこれやを思い浮かべ、そのように「できなかったことができるようになっていくこと」こそが「発達」なのだろうと考えるかもしれません。

でも、「それって、『学習』じゃないですか」と問われたら、どう答えられますか。いや、「学習」というのは、誰かが「教えようとした」ことについて「できるようになる」ことだけれど、「発達」というのは、別に誰も「教えていない」のに、子どものほうが「勝手にできるようになっていく」ことだと答えるかもしれません。しか



し、「学習」という言葉は、常に誰かが「教える」ことを前提にした言葉ではありませんが、「自学自習」という言葉があるように、自分で探求し、自分で学びとっていくことも立派に「学習」です。

いや、そういうアレヤコレという、具体的な知識や技能の獲得（それこそが「学習」ではなく、「一連の『そういうようなこと』がまとめて次々と学習できるような『基盤』のようなものが、子どもの中に整ってくることを『発達』というのです」という答えがあるでしょう。伝統的に発達心理学でいう「発達」というのは、おおよそそういうようなこととされてきました。しかし、現場で保育に携わっている人たちにとっては、「さまざまな学習の基盤のようなもの」と言われても、あまりピンとこないのではないのでしょうか。

そこでわたしは、「発達」をヒトがだんだん「人間になっていくこと」としたいのです。

ここで、あえてヒトとカタカナ書きにしたのは、生まれたての赤ちゃんを類人猿から進化したヒト科の動物として生まれた存在だとすることです。これは類人猿（たとえば、チンパンジー）と共通する特性をしっかりと備えていることを前提とするので、とくに、ここで「社会的であること」と「文化的であること」の二点だけを強調しておきましょう。近年の進化心理学は、ヒトがこの二点で「突出」して生まれ、それを一層「突出」させるべく成長していく動物であることを明らかにしています。つ



まり、赤ちゃんは、ますます「社会的」になり、ますます「文化的」になっていくという事です。そこでそういう社会的・文化的になっていくこと全体をまとめて、「人間」になっていく」ととらえるのです。

こうなると、赤ちゃんや子どもがいろいろ「できるようになる」ことを、ただ「アレができるようになった」「コレができるようになった」という「できるようになること」の項目が増えていくことばかりに目がいくのではなく、「あ、いよいよ人間」になってきたぞ」「うーん、これこそ、人間」だなあ」「ますます、人間」になってきたよ」「ああ、これがほんとうの人間」なんだ」という感嘆のまなざしで子どもの成長を見るようになるでしょう。それが、わたしの言う「子どもの「発達」を見る」ということです。

さて、子どもの発達を「人間になっていくこと」として感嘆のまなざしで見つめ、それを大切に育むというのが大人の役割なのですが、ここに、非常に怖い「おとしあな」があります。それは子どもを見ている大人の側に、つい「慾」が出て、「のぞましい人間」像を想定し、そこにどれだけ近づくかということにだけに関心を寄せることです。もつと怖いことは、「のぞましい人間」を、いつのまにか、「のぞましい行動特性」「のぞましい心情特性」「のぞましい身体特性」というような、「身に付けてほしいこと」のリストでとらえてしまうことです。これは結局、「発達」を個々のスキルの獲得とする「発達即学習」観に逆戻りです。ここからは、「発達を促す」と



いう名目での「早期教育」が直結しているわけで、「早期教育はおかしい」などと言っても、「発達を促進させてなぜ悪い」「むしろ、放っておくのは親（ないしは保育者）の怠慢だ」ということになります。

実は、最近の発達心理学は、もっと「怖いこと」を明らかにしてきました。それは、幼児が生まれてから、他者の行為の背後にある意図を理解し、他者の行為の意味を納得するとともに、それに協力するという方向で他者理解能力を発達させていく（まさに、社会的存在としての人間になっていく）のですが、学齢期に近づくにつれて、誰か大人（親や教師）が、「いいね、よく見てね、……（実演）、やってごらん」という「教示的構え」で臨むと、子どもは背後の理由や意味を考えることをあつさりとは投げ捨てて、「言われたとおりのことを行う」ことだけに注意を向けて、まさに「いいなりになる」という特性を発揮させるということです。そこに、集団の力が働くこと、それがもつと促進されます。これは「学校的「教授」「文化」を、子どもなりに「先取り」しているといえるでしょう。「文化適応」への傾向が過剰に働き、「人間になること」が「いいなりの人間になること」に向かつてしまいかねないのです。

保育というのは、子どもが本当の「よい人間」になろうとしている傾向をしっかりと受け止めるとともに、うっかり間違うと「へんな人間」にも容易になりかねない危険性をしっかりと踏まえうえて「発達」を保証し、それをゆがめ阻害するものには、断固として抵抗していくことではないでしょうか。

（青山学院大学）